

めん羊の新目標のイメージ

1. めん羊をめぐる情勢

わが国のめん羊飼育は、戦後の衣料不足と羊毛輸入の減少に伴う国産羊毛の需要増大により、昭和32年には毛肉兼用種であるコリデール種を中心に飼養頭数で94万頭に達した。しかしながら、昭和36年の羊毛輸入の自由化に伴う国産羊毛価格の下落等により、飼養頭数は、昭和51年に約1万頭まで減少した。

その後、中山間地の地域おこしの一環として、低利用草資源の活用、食生活の多様化への対応、牧歌的な風景による観光畜産の振興等を目的とし、肉専用種であるサフォーク種による生食用のラム肉（生後一年以内の羊からとれる肉）の生産が増加し、飼養頭数は平成2年で約2万2千頭まで回復した。

しかしながら、国産羊肉は輸入羊肉と比べ高価であるとともに、規格・品質面でバラツキが大きく、さらに国内でのスクレイピー病発生の影響等もあり、平成2年以降、再び減少に転じている。

羊肉の供給は、豪州等からの輸入によるものが大部分であるが、高級食材として利用されていた欧州産羊肉がスクレイピー病の発生により輸入停止となったことから、その代替として品質の高い国産羊肉に対するニーズが高まっている。こうした状況の中で、主産地である北海道及び岩手県等の各地域の専門的な生産者において、規模拡大等の取り組みの動きも見られる。

2. これまでの改良の取組みと成果

(1) 改良事業等の変遷

昭和初期までは、主に軍需羊毛の自給を目的とし、メリノ種をはじめとする多くの品種が海外から導入されたが、昭和12年には毛肉兼用種であるコリデール種が全体の7割以上を占めるに至った。

戦後においては、海外からの種畜輸入と国（家畜改良センター）や都道府県の関係機関による優良種畜の民間への配布が行われ、産毛能力や産肉能力の向上が図られた。

昭和30年代以降、輸入羊毛に押され、めん羊は主に肉用として生産されるようになったことから、飼養品種は肉専用種であるサフォーク種が主体となり、改良においても産肉性、肉質が重視されるようになった。

昭和50～60年代は、大型化を図るため、アメリカ、カナダから種畜を導入していたが、スクレイピー病の発生が確認されたため、平成2～3年にかけてニュージーランドからの種畜導入が行われた。現在、それらを育種素材とした改良増殖、種畜の配布等が行われている。

(2) 成果

ア 産肉能力 (サフォーク種)

平均的な出荷日齢である 9 ヶ月齢の体重は、過去 20 年間に於いて、おおむね増加傾向で推移してきたが、近年は横ばい傾向となっている。

イ 繁殖能力 (サフォーク種)

一腹当たりの平均離乳頭数は、おおむね増加傾向で推移している。

(3) 改良増殖をめぐる課題

産肉能力等の向上

若齢肉であるラム肉需要に対応するため、特に発育初期の増体性の向上が重要となっており、増体性、枝肉歩留まりの向上とともに、初期発育と関連の深い哺育能力の向上も課題となっている。

また、生産性の向上の観点から、強健なものへの改良も重要である。

優良な種雄羊の確保

飼養頭数の減少や海外からの種畜導入が困難化する中で、純粋種の減少及び交配用の種畜が限定され、近親交配が進むことによる影響が危惧されており、このため、国産の優良種雄羊の精液の広域的な活用を図ることが課題となっている。

粗飼料資源を利用した生産

めん羊は、大家畜では利用が困難な未利用草地や林地の下草を活用できる利点を有しており、これらの地域での飼育拡大が課題となっている。

ラム肉の周年出荷への取り組み

近年、国産羊肉に対する需要が高まる中で、年間を通じた安定供給に対するニーズが高まっており、季節外繁殖を取り入れた 2 年 3 回繁殖等によるラム肉の周年出荷の推進が課題となっている。

3 . 改良増殖目標

(1) 基本的考え方

最近の国産ラム肉に対するニーズの増大に対応するとともに、粗飼料の利用性等の特性を活かしためん羊の生産に資するため、生産性の向上と斉一化に重点をおいた遺伝的能力の改良の推進と併せて飼養管理の改善を図る

(2) 改良目標

能力及び体型

ア 産肉能力に優れたものとする。

産肉能力に関する目標数値（全国平均）

	4 ヶ月齢時体重		9 ヶ月齢時体重	
	雄	雌	雄	雌
現 在	kg 3 9	kg 3 5	kg 5 9	kg 5 4
目 標 (2 7 年度)	4 3	3 9	6 3	5 7

注：サフォーク種のものである。

イ 哺育能力等の繁殖能力を高めるものとする。

繁殖能力に関する目標数値（全国平均）

	1 腹当たり平均離乳頭数
現 在	頭 1 . 6
目 標 (2 7 年度)	1 . 7

注：サフォーク種の4 ヶ月齢離乳時のものである。

ウ 強健で肢蹄が強く，粗飼料の利用性が高いものにする。

エ 体積に富み後躯が充実し，体各部の均称のとれたものにする。

改良手法等

ア 近親交配の回避と不良形質の排除に努めるものとする。

イ 衛生管理を徹底するとともに、子羊の損耗の防止等により生産性の向上に努めるものとする。

ウ 凍結精液技術の活用による優良種畜の確保や周年繁殖の推進等により、効率的

なめん羊の改良・増殖に努めるものとする。

(3) 増殖目標

肉利用等の需要動向に対応し、草資源等の有効利用により飼養頭数の維持増大に努めるものとする。